

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：32670

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730587

研究課題名(和文) 健康な自己愛における自己価値欲求の脱中心化方略とその心理的效果

研究課題名(英文) healthy narcissism and decentering of need for self-worth

研究代表者

川崎 直樹 (Kawasaki, Naoki)

日本女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：90453290

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は“健康な自己愛”がどのようなものであるか検討することを目的として行われた。第1に自由記述調査や、行動観察と面接調査などによって探索的な概念化と検討を行った。第2に質問紙調査を行って、自己価値欲求を脱中心化する方略の一つとなりうるユーモアについての調査を行った。第3に、健康な自己愛の対照概念としての病的自己愛を測定する新しい尺度の邦訳版を作成した。第4に自己愛の諸形態と就職活動の進め方等との関連の調査を行った。第5に、自己価値欲求の脱中心化が実験操作によって生じうるか、その効果の検証を行った。以上から、健康的な自己愛に関してその特徴が考察された。

研究成果の概要(英文)：In this study, the personality process of healthy narcissism was explored. At first, free description survey, behavior observation and interview are administered to conceptualize it. Secondly, relationship between self-defeating humor, as a possible form of healthy narcissism, and unhealthy form of narcissism was examined. Thirdly, Japanese version of pathological narcissism Inventory was developed. Fourthly, relationship between healthy and unhealthy form of narcissism and job seeking process of undergraduates are examined. Fifthly, the effect of manipulation of decentering in experiment setting was examined.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自己愛 パーソナリティ 自己価値 脱中心化

1. 研究開始当初の背景

「自己愛」は、暴力や犯罪、引きこもりや就労拒否など、現代社会の多くの問題に関与すると言われる心的過程である。その自己愛の研究の多くは、病理的自己愛や自己愛性パーソナリティ障害など、その否定的な形態を中心に検討されており、その理解や治療・支援法について、さまざまな知見が蓄積されつつある(Ronningstam, 2005; Campbell & Miller, 2011)。

一方で、自己愛を“自己を価値あるものとして感じようとする心の働き”などと捉えた場合には、自己愛は必ずしも病理的で不健康なものではなく、むしろ誰しもの心に存在する基本的な心的機能であると理解することができる。自己愛はその機能の仕方によって、病理的にも健康的にも働きうると考えられるが、これまでの研究では、特に自己愛の健康的なあり方については、十分な実証研究がされているとはいいがたい。内心にある自己愛を適切な形で機能させる「健康的な自己愛」は、どのようなプロセスとして理解するのか、検討することが求められているといえよう。

2. 研究の目的

本研究では、健康な自己愛に関する概念化を行い、その測定法や操作法について検討を行い、それぞれの特徴を実証的に検証することを目的とする。“自己を価値あるものとして感じようとする”という自己価値への欲求が昂じて、それが個人の中心的な目標になってしまうと、私たちの認知や行動は、攻撃的になったり回避的になったりしがちである。反対に、自己価値を守ろうとする欲求を、他の欲求や目標と並存的に保持したり、そうした状態にある自身をやや俯瞰的に捉えたりすることで、自己価値への欲求にやや距離を置いて、建設的なふるまいがとりやすくなるのではないかと考えられる。こうした「自己価値欲求の脱中心化方略」について、その具体的な過程を検討していくこととする。

3. 研究の方法

研究手法としては、以下のいくつかのアプローチを複合して用いることとした。

(a) 「自己を価値あるものとして感じたい」という自己愛的欲求を脱中心化するための方略が、日常的にどのように表れうのか検討するため、自己価値の欲求の表現場面について、自由記述調査や知人同士での自然な会話行動の観察・分析を行った。

(b) 自己価値の欲求を非中心的に処理する方略としてユーモアが機能しうるかを検討するため質問紙調査を実施した。

(c) また、自己価値への脅威が持続的に生じる事態として学生の就職活動に注目し、自己価値欲求の脱中心化に関わる変数が、就職活動の実態に関与するかを検討した。

(d) 従来の研究では、自己愛の健康・不健

康を弁別できる妥当かつ標準的な測定手法がなかったが、近年ではPincus(2009)の病理的自己愛目録(Pathological Narcissism Inventory)が普及しつつある。そのため、質問紙調査によってこれを日本語化することとした。

(e) 自己価値以外の「目標」を意識・活性化することが自己愛的傾向を一時的にでも低下せうるかを、実験的に検証した。また脱中心化を目標の側面だけではなく、自己の俯瞰(self-distancing)の観点から検証する実験を行った。

4. 研究成果

(1) 自己高揚感の表現過程についての自由記述調査

目的

自己価値についての高揚的な感情が生じた際に、どのように表現や処理がなされているのか、自由記述調査を行った。

方法

調査協力者として、女子大学生 43 名に対して質問紙を依頼・実施した。

まず重要な他者からほめられる場面を 2 種設定し、その「言われたこと」や「うれしい気持ち」について、第三者である友人に話すかどうかをたずねた。「話すと思う」から「話さないと思う」までの 4 件法でたずねた上で、その「話す/話さない」理由と、「話す」場合の話し方について自由記述をしてもらった。2 種の場面には、自身がその出来事を話すことが、相手の自尊感情を刺激しにくい非葛藤場面(バイト先でほめられたことを大学の友人に話すかどうかの場面)と刺激しやすい葛藤場面(大学の科目担当教員からほめられたことを同じ科目を履修している友人に話すかどうかの場面)とを設定した。その他、中山・中谷(2006)の誇大性 評価過敏性自己愛尺度を使用した。

結果と考察

まず二つの場面で、自己価値の高揚感がどの程度他者に表現されたのかを集計したところ、Table1 のようになった。なお、比率の差の検定を行った結果、葛藤場面のほうが有意に高揚感が表現されにくいことが示された。表現をしない理由で最も多いのは“自慢に聞こえるから”など「自慢」となることの懸念であった。

なお、各場面の「話す/話さないと思う」の 4 件法の回答と、自己愛の誇大性・過敏性との相関を算出したが、係数はいずれも $r = .20$ を下回り有意な関連は見られなかった。ただし、「話さないと思う」と回答した者のうち、“自慢”という語を用いた者と用いていない者とを比較すると、葛藤場面における過敏性の得点には有意な差が見られた。「自慢になるから」などといった表現を用いた者のほうが、過敏性が低いことが示された。「自慢」という語を用いることで自身の自己高揚的な感情や欲求が露骨になることを避けて

おり、それが自己愛的な過敏性と関連している可能性が考えられた。

なお「話し方」については、素直な表現だけではなかった。高揚感を緩和・中和しながら表現する形や、高揚感をあえて強調・誇張して表現する形など、やりとりが円滑になるように配慮している様々な形が見られた。

Table1 自己価値の高揚感の表現

	非葛藤場面	葛藤場面
話すと思う/どちらかという、話すと思う	26	8
話さないと思う/どちらかという、話さないと思う	16	34
計	42	42

(2) 行動観察・面接調査

目的

大学生の自然な会話場面における自己高揚体験の表現について、検討を行う。

方法

協力者は、事前に趣旨説明を受け、知人と同士での参加に合意した女子大学生 7 名 (2 名組が 2 組、3 名組が 1 組) であった。

入室後に趣旨や手続きの説明やアンケートの回答などを行った後、自己を価値あるものとして感じた体験や、自己を価値のないものとして感じた体験について、自由に会話するように求めた。面接後に、個別に面接を行い、会話中の心情や意図、日常的な傾向などについて実験者が尋ねた。

結果と考察

特に、自己の肯定的な価値について話す場面に注目すると、「相手と競合しない非共通の活動領域での体験を話題として選ぶこと」、「自分から言わず相手に言ってもらうこと」など、控えめで謙虚な表現の仕方が見られた。また一方、「相手が“つつこみ”を入れられるようにあえて誇張して話す」「オチがつくように話す」など、ユーモアを用いる話し方が少なからず見られた。特に後者は、「会話を楽しむ」という上位目標の中で、「自己価値の高揚や表現」という目標が相対化・打津中心化されているものとも考えられた。

(3) ユーモアに関する質問紙調査

目的

自己価値の感覚を脅かすような否定的な自己を、内的にも社会的に受け入れることを助けてくれる対処法として、ユーモアがある。そこで、自己の否定的な特徴やエピソードを扱う“自虐性ユーモア”に着目し、自己愛の諸形態とどのように関連するのか、以下検証を行うこととする。

方法

自己愛について、誇大性を中心的に測定するための自己愛人格目録(NPI: Narcissistic Personality Inventory)の短縮版(小塩, 1998)と、脆弱性を測定するための自己愛的脆弱性尺度(NVS: Narcissistic

Vulnerability Scale)の短縮版 20 項目(上地・宮下, 2009)を用いた。それぞれ下位尺度得点と合計点を算出した。

自虐的ユーモアを多面的に測定するため、吉田(2012)による日本語版ユーモアスタイル質問紙の下位尺度としての自虐的ユーモア尺度、塚脇・樋口・深田(2009)のユーモア表出形態尺度の中の自虐的ユーモア尺度、楳本・山崎(2010)の対人ストレスユーモア対処尺度を用いた。なお先行研究の結果から、吉田の尺度は不適応な変数との関連が、塚脇らの尺度は自己受容など適応的変数との関連が報告されているため、それぞれ「不適応的自虐的ユーモア」「受容的自虐的ユーモア」と呼んで区別することとした。

結果と考察

全尺度の相関係数を算出した結果が Table2 である。自己愛に関する尺度は、誇大性を反映する NPI も、脆弱性を反映する PNI も、いずれのユーモア尺度とも正の関連を全体に示していた。想定と異なり、自己愛の傾向が一義的に自己否定的体験に対するユーモア対処と関連を示すという結果は得られず、むしろ自己愛的な傾向を持つ者が、自己価値を守るために積極的に用いる方略である可能性が示唆された。今後より詳細な検討が必要であると考えられる。

Table2 ユーモアとの関連

	対人ストレス ユーモア対処	受容的自虐的 ユーモア	不適応的自虐的 ユーモア
NPI合計	.388**	.316**	.355**
優越感・有能感	.323**	.229**	.243**
注目・賞賛欲求	.332**	.250**	.397**
自己主張性	.341**	.335**	.264**
NVS合計	.270**	.205**	.336**
承認賞賛過敏性	.177**	.128**	.272**
自己顕示抑制	.272**	.270**	.348**
潜在的特権意識	.201**	.121**	.241**
自己緩和不全	.254**	.163**	.264**

**p<.05, *p<.10

(4) 病理的自己愛目録日本語版の構成

目的

近年、自己愛の病理性をより反映しながら、誇大性と脆弱性を包括的に測定できる尺度として、Pincus et al.(2009)の病理的自己愛目録(PNI: Pathological Narcissism Inventory)が注目を集めている。健康な自己愛の特徴を対照的に表現するためにも、この尺度は有用であると考えられる。邦訳版はまだ存在しないため、本研究では、PNI 日本語版(PNI-J)の作成を目的とし、因子構造の確認と妥当性・信頼性の検討を行う。

方法

ウェブ調査会社を通して質問紙調査を依頼・実施した。対象者は 402 名(男性 189 名、女性 213 名、平均年齢 39.2 歳(SD = 11.04))。なお再検査信頼性の検証のための約 2 ヶ月後の追跡調査も行い 158 名から回答が得られた。

調査内容は以下のとおりであった。(1)

病理的自己愛目録を日本語に翻訳した 52 項目(6 件法)を用いた。翻訳にあたっては、まず心理学の研究者ら 2 名による邦訳原案を作成後に、予備調査を行って表現の調整を行った。その項目を翻訳専門家 2 名がそれぞれ英語にバックトランスレーションを行い、内容を原著者に確認を受けた。再度、表現を調整後、最終版を作成した。(2)自己愛人格目録短縮版(NPI-S;小塩,1998)、(3)邦訳版マキャベリアニズム尺度第4版(MACH-IV;中村他,2012)、(4)日本語版 Levenson Self-report Psychopathy Scale (LSRP;杉浦・佐藤,2005)、(5)日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ;安藤他,1999)、(6)評価過敏性-誇大性自己愛尺度(中山・中谷,2006)、(7)日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J;小塩他,2012)、(8)自尊感情尺度(山本他,1982)、(9)自己価値の随伴性尺度(CSWS;伊藤・小玉,2006)、(10)仮想的有能感尺度(ACS-2;Hayamizu et al., 2004)、(11)恥尺度(PFQのshame scale;大西,2008)。なお(1)と(2)を全対象者に、(3)から(6)を全体のうち199名に、(7)から(11)を全体のうち203名に実施した。

結果と考察

Wright et al.(2010)が提案した因子モデルに準じて、確認的因子分析を行った結果、各項目から各下位因子に対して仮説どおりの影響関係と一定の適合度がみられた。

約2ヶ月の間隔を空けての再検査信頼性については、 $r=.547 \sim .683$ と許容できる値が確認された(Table3)。

次に妥当性の検証のため、各変数との相関をTable3に示した。PNI-Jの誇大性得点は、自己愛的な誇大性を反映するNPI-Sと比較的高い相関を示した。また、中山・中谷(2006)の誇大性・評価過敏性の各尺度とも、PNI-Jの誇大性・脆弱性と7下位尺度は概ね対応した相関関係を示した。さらにPNI-Jがこれら既存の自己愛の尺度と正の関連を示す一方、自尊感情とは負の関連、恥感情とは正の関連を全体的に示している。このことからPNI-Jは、自己愛の誇大性と脆弱性の双方を包括しながら、全体として自己愛の“病理性”や不健康性も反映できていると考えられる。

Table3 PNI と諸変数との関連

	再検	NPI-S	PNI (Big5)											
			誇大性	脆弱性	マキャベリアニズム	サイコパス	自尊感情	仮想的有能感	恥感情	外向性	協調性	衝動性	神経開放性	
PNI合計	.610**	.463**	.307**	.611**	.257**	.363**	-.197**	.509**	.310**	.355**	-.218**	.227**		
PNI誇大性	.562**	.610**	.496**	.364**		.315**		.337**	.203**			.160**		
誇大空想	.547**	.448**	.420**	.447**	.217**	.368**		.315**	.279**		-.169**	-.169**		
自己価値の自己風情	.572**	.451**	.211**	.330**				.397**	.239**					
探取性	.644**	.587**	.569**			.225**	.390**		.250**	-.217**	.297**	.290**	-.156**	.268**
PNI脆弱性	.638**	.316**	.145**	.656**	.286**	.214**	.332**	-.299**	.533**	.325**	.421**	-.194**	-.245**	.299**
随伴的自尊感情	.599**	.361**	.156**	.653**	.170**	.218**	-.238**	.576**	.278**	.389**		-.236**	.246**	
脱価値化	.636**	.130**		.562**	.195**	.184**	.263**	-.400**	.383**	.242**	.435**	-.266**	-.233**	.317**
権威的憤怒	.575**	.364**	.283**	.469**	.428**	.240**	.432**	-.163**	.467**	.391**	.309**		-.270**	.303**
自己規範	.683**	.112**		.389**	.149**	.249**	.176**	-.260**	.308**	-.169**	.300**	-.256**		.139**

(5)就職活動に関する調査

目的

自己価値に対する脅威状況が一定期間持続的に生じるライフイベントとして、就職活動がある。この調査では、健康な自己愛を反映する尺度の試案を作成し、先述の病理的自己愛とともに、学生の就職活動のあり方に影響を示しうるか、調査を行うこととした。

方法

ウェブ調査会社を通じて199名の就職活動生に調査を依頼・実施した。時期は2015年3月下旬である。

調査内容としては、健康な自己愛に関する尺度の試作版27項目、病理的自己愛目録(PNI)の下位尺度である随伴性自尊感情と誇大空想、就業動機尺度(古市,2007)、就職活動プロセス初期活動尺度(杉本,2007)のほか、就職活動への現時点での満足度などをたずねた。

結果と考察

健康な自己愛尺度試作版について、因子分析を行った結果、「率直な自己関与」「自己像の防衛」「熟慮した自己関与」の3因子が抽出された。これを元に下位尺度を構成した。

各変数の相関係数はTable4に示したとおりである。自己愛に関する諸変数は、様々な動機の強さとは関連を示していた一方、就職活動における具体的な行動には顕著な関連を示さなかった。なお「誇大空想」は「上昇」の動機と高い関連を示したが、「率直な自己関与」と「上昇」の動機との関連は相対的に低いものであった。自己愛の諸特徴は、こうした動機のあり方を介して、種々の活動のあり方にも影響を与える可能性が考えられる。

Table4 就職活動の諸側面との関連

	誇大空想	随伴性自尊感情	率直な自己関与	自己像の防衛	熟慮した自己関与
予備的探索活動	.192**	.249**			
補助的活動	.144*				
エントリー活動					
周囲との相談活動	.234**				
自己と企業のマッチング					
社会貢献	.308**	.354**	.436**		.175*
自己実現	.231**	.261**	.360**		
上昇	.422**	.309**	.154*		
人間関係	.323**	.282**	.293**		
労働条件	.178*	.233**	.263**		-.141*
就活の満足度					
精神不健康					

(6)目標の活性化についての実験

目的

自己にとって重要な価値や目標を筆記したり宣言したりすることは、自己にまつわる脅威情報に対する許容的な反応つながらといわれる(Crocker, Niiya, Mischkowski, 2008)。大きな価値を強調することによって、自己防衛的な目標が相対的に中心的でなくなるプロセスであると考えられる。そこで本研究では、介入的手法への示唆を得るため、

自己価値の欲求に中心化された心理状態が、価値についての思索や筆記によって脱中心化されるかを検討することを目的とする。

方法

女子大学生 77 名 (平均年齢 20.43 歳、標準偏差 8.64) に実験協力を依頼、質問紙を用いて一斉に教示して実験を行った。

筆記する目標には、他者との良好な関係性についての目標 (関係性目標) を書く群と、自己の有能性にまつわる目標 (有能性目標) を各群と、それらを書かない統制群とを設定した。今後一年間に、「行ってみたい場所」「読んでみたい本」について記述を求めるダミー項目 2 問に加え、関係性目標群には「仲良くしたい相手」について、有能性目標群には「身につけたい能力・技術」について記述を求める 1 問を提示した。統制群には、最初の 2 問のみを提示した。記述時間は 8 分と設定した。目標の筆記後、従属変数として、先述の中山・中谷(2006)の自己愛の誇大性-評価過敏性尺度と、川崎(2010)の現実回避尺度への回答を求めた。目標の筆記によって、一時的にでも自己愛的な心性に変化が見られるかを検討することとした。

結果

一要因分散分析によって、3 条件間で、各従属変数の平均値を比較した結果が Table5 である。いずれの従属変数にも有意な差は見られず、F 値の低さなどから考えても、本アプローチによる即時的な効果は積極的には示されなかった。

Table5 目標の筆記の効果

従属変数		関係性 目標群 (N=24)	能力 目標群 (N=25)	統制群 (N=27)	F(2,73)	p
誇大性	M	24.1	24.8	24.3	.09	.92
	SD	6.0	5.0	6.5		
過敏性	M	24.5	25.9	25.1	.25	.78
	SD	7.2	5.7	7.1		
現実回避	M	45.0	46.4	45.5	.21	.81
	SD	7.2	7.8	8.5		

(7)自己俯瞰的な自己内省について

目的

自己否定的な体験を振り返る際に、当時の自分自身の視点から“私は・・・”といった一人称の言葉遣いで振り返るのか、「あなたは・・・」「Jennifer は・・・」といった非一人称の言葉遣いで振り返るのかによって、心理的な影響は異なることが Kross & Ayduk(2008)などによって示されている。これもまた、自己価値の防衛に中心化された状態からの脱中心化を促しうる認知的過程の一つと考えられるため、その効果を検証するとともに、自己愛にまつわる変数との関連を検討する。

方法

趣旨と概要説明の上でウェブ調査への参加を合意した 100 名に実施した。

Kross & Ayduk(2008)などを参考に実施した。協力者はまずウェブ画面上で、PNI の下

位尺度「随伴的自尊感情」と「誇大空想」などに回答をした。その後、過去の自己否定的出来事の一つ想起することを求めた。その後、それによる「気持ち」「反応」の想起の鮮明さなどを尋ねる質問と状態自尊感情尺度に回答を求めた。その次には、その出来事が自分を否定的に感じさせた理由の記載を求めた。その際、一人称条件の者には、“できるだけ「私」「僕」「おれ」などの「一人称」の言葉を使って”、非一人称条件の者には“できるだけ「あなた・お前」や「自分の名前」などの「非一人称」の言葉を使って”、理由を考えるよう求めた。統制群には特に理由の書き方に指示はしなかった。理由の記述後、「気持ち」「反応」の鮮明さなどのほか、記述時の自己俯瞰度(“・・・自分自身の目線に入り込んで、その場面の再生を見ている感じでしたか? 第三者の観察者のように一歩引いて、その場面の展開を見ている感じでしたか? ”)を 7 件法で回答を求めた。また、状態自尊感情尺度にもう一度回答を求めた。

結果と考察

まず、はじめの自己否定的体験の想起において「特にない」「思いつかない」などと回答した者 33 名は今回の分析から除外した。残り 67 名を分析対象とした。

各変数について一要因分散分析を行った結果、条件間で仮説を支持するような結果は得られなかった。

なお 3 条件のデータをまとめ合わせ、記述時における自己俯瞰度と、病理的自己愛の 2 下位尺度との関連を検討したところ、随伴性自尊感情が高いほど、俯瞰度が低いことを示す相関が有意傾向であった ($r = -.22, p < .10$)。自尊感情の揺れ動きやすさと、自己否定体験について記述するときの自己視点への没頭は関連する可能性があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

川崎直樹、小塩真司、病理的自己愛目録日本語版 (PNI-J) の作成 (1) 因子構造の検討、日本パーソナリティ心理学会第 24 回大会発表論文集、2015 年 8 月 21-22 日、北海道教育大学札幌校 (北海道札幌市)。

川崎直樹、小塩真司、病理的自己愛目録日本語版 (PNI-J) の作成 (2) 信頼性・妥当性の検討、日本心理学会第 79 回大会発表論文集、2015 年 9 月 22-24 日、名古屋国際会議場 (愛知県名古屋市)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

川崎直樹 (KAWASAKI Naoki)

日本女子大学人間社会学部・准教授

研究者番号：90453290